

社会的事象とのかかわり方を創造する子の育成（2年次）

～実社会との接点を重視した課題解決型学習の要件～

中山 和幸

小学校社会科が担う最大の使命は、子どもたちに「公民的資質の基礎を養うこと」である。そのためには、子どもたち一人一人が社会に生きる市民としての自覚や責任をもち、自分たちの住むまちの課題を見つけ出し、課題を解決するための方法を考え、まちづくりに参画していけるような力、すなわち「社会参画力」を育成する必要がある。昨年度の検証結果より、「社会参画力」を育成するためには、「地域課題の教材化」、「実社会にある本物の問題の解決」、「学びの発信」がそれぞれ効果的であるということがわかった。そこで、本研究は、より汎用性の高い研究となるよう、昨年度とは異なる学年、異なる単元においてもそれらの手立ての効果を検証しようと試みたものである。子どもの社会参画力を育成するために、地域課題を教材化し、子どもたちの学習問題として実社会の課題を取り上げることや学びの発信には成果が見られた。しかし、子どもたちの学習問題としてどのような地域の課題を取り上げるのか、どのような人と関わらせるのか、といった点では実践上での難しさがあり、だれもが実践できるようにするためには、教師がそれらについて吟味するための視点や条件の明確化が必要である。

キーワード：公民的資質の基礎、社会参画、地域課題、本物の問題

1. 研究の目的

昨今、「社会に開かれた教育課程の実現」が叫ばれる中で、学校と社会の教育目的の共有や連携をよりいっそう大切にしていける必要がある。しかし、その方法論はまだまだ確立されておらず、だれもが積極的に取り組めるようなものではなく、一部の教室や一部の学校での実践の域を脱してはいないように思われる。

このような状況の今だからこそ、実社会との接点を重視した課題解決型学習の要件について研究することは大変意義深いものであり、さらに具体的実践に加え、その方法論を明らかにすることで多くの教師が実践に生かすことができる汎用性の高いものになり、その意義がさらに深いものになると考える。

1. 1. めざす子ども像

本研究にかかわって社会科の授業でめざすのは、人のさまざまな工夫や努力によって社会的事象が成り立ち、自分の生活が支えられていることを理解しながら、自分の生活・行動を振り返り、社会的事象とのかかわり方を創造する子どもの姿である。

本研究では、社会科の授業をとおして、このような「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」の具現化に取り組みたい。

1. 2. 授業の要件

本研究では、社会参画力のある子どもを「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」と捉え、授業実践に挑んだ。

上記の子どもの姿を具現化できる授業の要件とはどのようなものだろうか。以下の3点を重視した授業づくりを行うことで育てたい子どもの姿を具現化したいと考え

た。

- ①地域教材を扱った学習を構想する。
- ②地域の人が困っている地域課題の解決に挑む問題解決学習を構想する。
- ③学んだことを地域に発信する（生かす）場面を設定する。

本研究の主たる目的である「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」を実現するためには、まず、地域教材を扱った単元を構想し、子どもたちが実社会にある本物の問題と出会い、かかわることで、さらによりよいかわり方を模索することが重要であると考えた。そのため、上記①②③は授業の要件として欠かせないものと考えた。

1. 3. 研究仮説

これまでのことを踏まえ、「社会的事象とのかかわり方を創造する子ども」が育つための研究仮説を以下のように設定した。

地域教材を扱い、地域課題の解決に挑む問題解決学習を構想することで、子どもは、考えを更新しながら、社会とのかかわり方を創造していくだろう。また、学んだことを地域に発信する（生かす）ことをとおして、子どもは、地域にかかわることのよさを実感し、よりよい社会的事象とのかかわり方を創造する子どもに育つだろう。

このように、前述した授業の3要件を大事にしながら、①問題とのかかわり→②問題解決方法の追究→③問題解決方法の決定→④問題解決方法の実行→⑤問題解決の5つの学びの点を通して、めざす子ども像を具現化でき

ると考えた。

2. 研究の方法

以上のような仮説をもとに仮説検証型の研究実践を行い、研究の成果と課題を明らかにする。

具体的には子どもの振り返り作文をもとに、子どもの学習の進め方や社会的事象とのかかわり方を創造する姿をみとり、研究の成果と課題を明らかにする。

2. 1. 地域社会にある課題を教材化する

地域課題の教材化は、地域に閉じこもって学習することではなく、むしろ視野を広げるために必要である。なぜなら、地域という「物差し」をとおして、他と比較したり、類似性や相違性をみつけたりすることによって、他を知り、他に学ぶことを可能にするからである。地域は子どもたちにとって、身近でありながら、世界とつながっており、同時にまた、世界の縮図を見ることができるのである。

ここで、本実践において用いられる「地域」とはどのようなものかについて改めて整理しておきたい。

地域とは、子供たちが生活している場所であり、そこはたくさんのよりよく生きようとする人々が暮らしている場所である。また、子供たちにとって、物理的に近いだけでなく、子供たちにとって、親近感が湧いたり、強く思い入れがあったりするなど、心の距離が近い場所である。

2. 2. 実社会にある本物の問題と出会う

子どもは知識・経験とのずれが生じる社会的事象と出会うと驚きや不思議さを感じ、問いをもつ。また、学習を進める中で、自分たちの学習のサポートをしてくれた地域の人たちが困っている問題と出会うと一緒に考えたい。さらに、自分たちの願いとは真逆の社会の実態に出会うと大きく問題意識を持ち、問題を解決したくなる。

このように、子どもたちは社会に実在する様々な問題に心を動かし、追究意欲を高める。

実社会にある本物の問題に出会うことは、このように子どもたちの追究意欲を高めることができるだけでなく、子どもの問題解決を現実的にするよさがある。子どもの思考を現実的なものにすることで、後の問題解決も現実的なものとなり、非現実的で空想的な社会的事象とのかかわりは避けることができるだろう。

実社会にある問題の中には、大人でさえも解決方法に悩んでおり、答えが見出せないものがある。大人が実社会の中で悩んでいる問題を子どもたちが解決することは容易ではなく、そもそも明確な正解があるものではないだろう。しかし、そのような「答えのない問題」に対して、子どもたちが主体的に調べ、仲間と協働して問題解決を図ることで「社会的事象とのかかわり方を創造する姿」を引き出したいと考えた。

2. 3. 学んだことを地域に発信する（生かす）

変化に富む現代社会に生きる一人の人間として、社会

的事象とのかかわり方を創造するために子どもたち一人一人に社会の一員としての自覚を育てる必要がある。そのためには、教室内部に閉じられた社会科学習では、不十分であり、自分たちが学習をとおして、思考し、理解したことを地域に提案・発信していくような「地域への働きかけ」を行ってこそ、社会の一員としての自覚をより強くもてるのではないかと考えた。

単元の終末において、子どもたちがよりよい社会の形成のために構想したことを地域の人に発信していく。このような活動が子どもたちの経験知となり、社会の一員としての自覚を深めていくことができるのではないかと考えた。

3. 授業の実際

3. 1. 地域にある問題の解決に挑む

本実践における地域の問題は「南海トラフの地震によって起こる津波による犠牲者をゼロにすること」であった。今後30年以内に南海トラフの地震は約70%程度の確率で起こると予想されている。和歌山県は、この地震で起こる津波によって甚大な被害が出る地域であると予想されており、和歌山県庁は「津波から『逃げ切る！』支援対策プログラム」を独自に策定し、また、「津波による犠牲者をゼロにするために」というスローガンを掲げ、ソフト面、ハード面の両面で様々な対策を行っている。しかし、対策は進めるものの、津波による犠牲者をゼロにするためにはたくさんの問題点が残されている。例えば、和歌山県南部では、地震発生後約3分で津波が押し寄せてくる地域があり、押し寄せてくる最高津波高は19mにも及ぶと予想されている。海岸沿いに住んでいる人々はたくさんおり、津波の被害を避けるために引っ越しをすすめるが、それもうまく進まないのが現状であり、高齢者の中には、逃げることをあきらめている人すらいる。そのような現状を知った子どもたちの多くが最初に感じたのは「津波による犠牲者をゼロにするのは無理ではないか？」という思いであった。知れば知るほど絶望的にも思えてくる、この和歌山の状況を何とかしたい、自分たちにできることはないかと子どもたちは意欲的に学習に取り組んだ。

本実践において、地域にある問題を子どもたちが認識するためにとった手立ては大きく以下の2つであった。

- ①「和歌山県庁の防災企画課」の方に和歌山の置かれている現状（特に問題点）を話してもらい、問題を解決するために様々な対策を行っていることを確認できるようにする。
- ②「和歌山県庁の防災企画課」の方から、この問題を解決するためには、小学生の子どもたちにも協力してもらい、子どもも大人も防災意識を高めていく必要がある」という助言をもらうことで、自分たちにできることがあることを認識させ、問題解決の意欲を高めることができるようにする。

3. 2. 自分たちにできること～ちいきっずカフェ～

「津波による被害をゼロにするための方法」を模索するために子どもたちは調べ学習と話し合いを繰り返し、様々な解決方法を一人一人が考えることができた。そして、「自分たちが解決方法についてわかっているだけでは不十分だ。地域の人たちにも伝えてみんなで防災意識を高める必要がある」という考えに至った子どもたちが、考えたのは、「ちいきっずカフェ」で自分たちの思いや考えを伝えることで和歌山の抱えている防災の問題を少しでも解決の方向に進めていくということであった。

ここで、「ちいきっずカフェ」について少し、説明を加えておく。

「ちいきっずカフェ」

- ・地域の方々に向けて街中で行う「学習発表会」。
- ・「テーマ」を設定し、「ブース」を設け、地域の方を呼び、自分たちの思いや考えを発信する。

「ちいきっずカフェ」に向けて子どもたちは準備を行い、街中で「防災意識を高めるための活動」を行った。そこでは地域の方々に自分たちの思いや考えを発信することができた。

「ちいきっずカフェ」では、「津波が起こるメカニズム」、「南海トラフ巨大地震で予想される被害」、「津波避難3原則」、「和歌山県庁の方が進めている防災対策」などを伝えるために「ゲーム」や「クイズ」などを準備して活動を行った。

「和歌山の防災にかかわる問題」を自分たちなりに重く受け止め、「自分たちにできることは、少しでも和歌山県の取り組みや津波について知ってもらいたい」「そして、そのためにちいきっずカフェで地域の方々に考えを伝えるんだ」と自分たちなりにできることを考え、実行に移していく主体的な問題解決の姿が見られた。

4. 授業の考察

本研究実践について、「あゆみ」の振り返り作文をもとに仮説の検証を行い、本研究主題に掲げている「社会的事象とのかかわり方を創造する子ども」の具体的な姿を明らかにしたい。

4. 1. 自分なりの願いをもって社会的事象にかかわる

図1には、「私達ができることはたくさんあります。ひなん訓練とか、防災マップ作りとか。できないと思っているからできないんだと思います。」という記述がある。クラスの友達が、被害者ゼロは難しいと考えていることを受け、「あゆみははっきりと私達ができることはたくさんあります」と言っている。

このように、津波による被害者ゼロを実現することは簡単ではないと知っていながら、また、多くの友達は被害者ゼロは難しいと発言していることを受けながら、それでも、「できないと思っているからできない」と自分なりの思いを明らかにしている姿は、社会的事象に対して自

分なりの願いをもってかかわろうとしている姿と言えるのではないだろうか。

10月11日に向けて今まで南海トラフや東海、東南海、中海3連動地震のことを勉強してきましたよね？(問)だから津波による被害者ゼロは、かん単ではないことはわかります。しかし、みんな最初からあきらめて、「せ、たいムリヤで」とか、「できへんのとろ、う？」っていているからできないと思います。私達ができることはたくさんあります。ひなん訓練とか、防災マップ作りとか。できないと思、ているからできないんだと思います。

図1：あゆみの振り返り作文①

4. 2. 問題解決の「見通し」をもつ

問題解決に向けて、「わたしたちにできることはたくさんある」と考えたあゆみは、「具体的にできること」を考える上で東日本大震災の時に被害が少なかった地域をヒントに考えていこうと試みた。図2からは、被害が少なかった地域が宮城県釜石市、岩手県洋野町であることを見つけ、それを和歌山県でもやっていくと問題を解決することができるのではないかと、「見通し」をもつことができていく様子が伺える。

自分が知らなかった社会的事象を知り、その社会的事象に問題解決のヒントを見出し、「見通し」をもって問題解決をすすめる中で、解決に向けた自分なりの考えをより確かにしている様子が読み取れる。

私はできると思っています。だ、てかまいし、岩手県洋野町八木地区は、被害者ゼロだから、和歌山もできると思う、「こうしたら被害者ゼロ、っていうのがあろうと思うから、それを和歌山でやればいいから。」

図2：あゆみの振り返り作文②

4. 3. 問題解決に向けて「考えを更新」する

あゆみは、問題解決に向けて、さらに追究をすすめていく中で、「津波による犠牲者が少ない地域」は「(防災)の意識が高く、日ごろから備えをしていた」ことに気が付く。(図3)

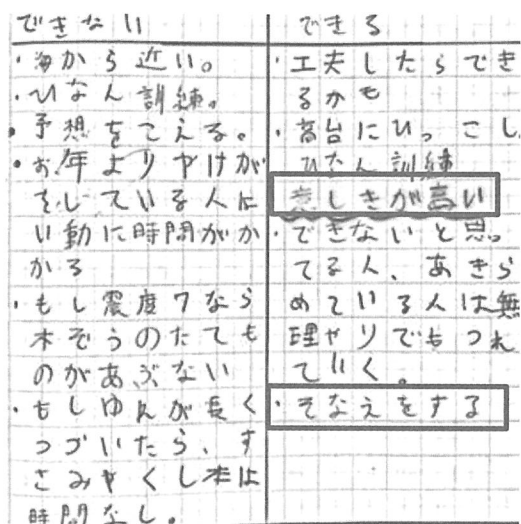


図3：あゆみの振り返り作文③

その後、あゆみは、当初から自分の内にあった「できない」、「むり」と思っている人ができないと思うという考えに加え、「しっかり対策して、ふだんから話し合っておけばいい」という考えに至っている。「対策」、「話し合い」については、あゆみが追究する過程の中で見つけた問題の解決策であり、「問題解決に向けて、しっかりと対策しておき、備えをしておけば、「津波による犠牲者はゼロにできる」と「考えを更新」する姿が伺える。(図4)

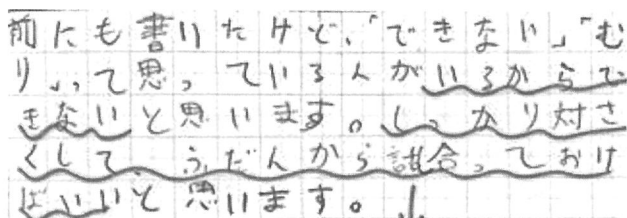


図4：あゆみの振り返り作文④

さらに、あゆみの追究は、「ちいきっずカフェ」で何を発信するかということに意識が向き、「津波による犠牲者をゼロにするために、東日本大震災の時に、被害者がゼロだった町のことを伝えたいと思います。」と考えるようになった。このことも、何を伝えるかという問題に対して、「東日本大震災の時に被害者がゼロだった町のことを伝える」という「意思決定」をあゆみ自身が自分の追究の経験をもとに行っており、「考えを更新」する姿だと考える。

4. 3. 実社会に働きかける活動で学習活動を吟味し「意思決定」する

「ちいきっずカフェ」において、「東日本大震災の時に被害者がゼロだった町のことを伝える」ことを決定したあゆみは、伝える方法として、「劇」か「話」かの吟味を行った。(図5) この吟味は、実際に自分たちが行う活動として具体的にイメージできているからこそ、起こったものであると考えられる。この点においても、あゆみの「意思決定」の場面が見られ、「学んだことを地域に発信すること」のよさが表れていると考える。

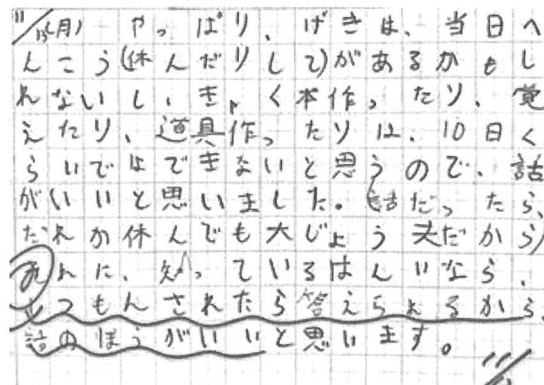


図5：子どもの振り返り作文⑤

4. 4. 地域に発信することで社会に関わるよさや意義を実感する

図6には、自分たちが発信した後に湧きおこった、来年もやりたい気持ちが記述されている。活動のよさを実感できた証ではないかと考える。また、「私たちにはできることが思っているよりもっとあるよ！っていうのを伝えたいです」という記述には、私たちにできることを考えてやっていくことの意義を改めて実感し、そのことを他にも伝えていこうとする姿が現れていると考える。

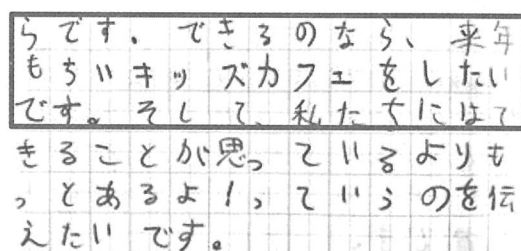


図6：子どもの振り返り作文⑥

5. 成果と課題

地域の課題を教材化し、地域にある現実の問題解決を学習の中に位置付けることは、子どもにとって切実感のある問題づくりを助け、子どもが問題解決の見通しをもち、自分なりの願いをもって、考えを更新しながら、社会的事象にかかわる姿を具現化することに効果的であった。

そして、学習をとおして考えたことを地域に発信するなどして、実社会に対して働きかけていくことは、社会的事象に対する認識を深めたり、子どもの「意思決定」を促したり、さらには、自分の学びの意義を実感したりすることに効果的であった。

一方で課題もある。子どもたちの学習問題としてどのような地域の課題を取り上げるのか、どのような人と関わらせるのか、といった点では実践上での難しさがあり、だれもが実践できるようにするためには、教師がそれらについて吟味するための視点や条件が必要である。

参考文献

- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説社会編」
- ・唐木清志・西村公孝・藤原孝章(2010)「社会参画と社会科教育の創造」学文社